

# 1. 李白の閨情詩——閨情・閨怨の百花開く

下定 雅弘(岡山大学)

はじめに

李白は閨情・閨怨を非常に愛好している。拙論「杜甫の閨情詩」<sup>1</sup>に挙げた表を見ていただきたい。閨情詩は、ほぼ一千首中一二〇首を超え、唐の詩人の中では、極めて閨情詩の比率が高い。<sup>2</sup>盛唐の詩人の中では、李白は最も閨情を好んだ詩人である。

事項 詩人	詩数	閨情詩	非閨情詩	比率
孟浩然	202	11	15	5.4/7.4
王昌齡	183	22	5	12/2.7
王維	384	19	22	4.9/5.7
李白	1003	122	88	12.2/8.8
杜甫	1457	9	70	0.6/4.8

※閨情詩の数は、いずれもその内容を広く考えた数。

李白は、樂府詩を多数作った。『唐音統籤』によれば、現存する約一千首の李白詩のうち二割以上は樂府である。<sup>3</sup>閨情詩のうち、樂府作品の占める比率はほぼ三分の一にあたる。

古樂府及び、六朝の樂府には閨情・閨怨を題材もしくは主題とするものが多く、李白の詩は自然、閨情詩が多数を占めることになる。

女性の美への愛の強さ、樂府への関心の高さ、この両者が、李白詩中、閨情詩がこれほど多い原因である。なお小稿で閨情詩は閨怨詩を含む概念として用いているが、実際のところ、閨怨ならぬ閨情の詩はほぼ二〇首であり、圧倒的多数は閨怨詩である。

本発表では、閨情詩の主体である女性の身分により閨情詩を分類して、李白の閨情詩の概要を確かめたい。以下、李白は、どのような女性の姿態や思いを詠じたのか、その作品数の多い順に大勢を記しておく。ただし、今後の調査・研究により、作品の分類や、数量は若干の変化を生じるかもしれないことをお断りしておく。

## 一、 歴史故事上の女性

歴史故事の女性が主体である作は一九首。<sup>4</sup>うち樂府<sup>5</sup>は、「于闐採花」(王昭君)、「王昭君二首」其一・其二、「中山孺子妾歌」(班婕妤、戚夫人)、「白頭吟」(陳皇后)、「妾薄命」(陳皇后)、「陌上桑」(羅敷)、「子夜吳歌」春歌(羅敷)・夏歌(西施)、「長信宮」(班婕妤[詩の内容主体、以下同じ])、「長門怨二首」其一・

<sup>1</sup> 『杜甫研究年報』5、2022.3。

<sup>2</sup> 杜甫は李白とは対照的。閨情・閨怨の詩にはほとんど関心がない。閨情表現を、現実の表現の中に組み入れて、現実描写を豊かにし迫真性を高めている。拙論「杜甫の閨情詩」に詳しい。

<sup>3</sup> 『樂府詩集』では119首。1割2分。

<sup>4</sup> 以下、詩題は樂府と非樂府に分けて挙げ、それぞれの中では全唐詩の収載順に従う。

<sup>5</sup> 『唐音統籤』で樂府に分類する作品及び『樂府詩集』に収載する作品。

其二（陳皇后）の一二首。

非樂府作は、「古風」其二（陳皇后）、「遠別離」（娥皇・女英）、「西施」、「廬江主人婦」（焦仲卿の妻）、「平虜將軍妻」（劉勳の妻）、「口号吳王美人半醉」（西施）、「望夫石」（夫を望む女）。

陳皇后と班婕妤を主体とする作が多く、王昭君・西施がこれに次ぐ。この類の詩は、君王を諷諫するもの、自己の不遇を寄託する作が少なくない。

## 二、征夫の妻

征夫の妻が主体である、いわゆる征婦怨が一八首。うち九首、半数が樂府作品である。その詩題は以下の通り。「北風行」、「独不見」、「塞下曲六首」其四、「塞下曲六首其五」、「折楊柳」、「秋思」、「子夜吳歌」秋歌、「子夜吳歌」冬歌、「長相思」（以上、樂府）。「春思」、「擣衣篇」、「擬古十二首其一」、「寓言三首」其三、「閨情」、「春怨」、「代贈遠」、「学古思辺」「思辺」（以上、非樂府）。

これらはおおむね、遠方にいる征夫に衣を送る、あるいは手紙（廻文の錦字を含む）を送るといった時の妻の思いを詠じている。従来の征婦怨の表現をいかにレベルアップし豊かにしているかを、「子夜吳歌」「長相思」等で見たい。

この類においても、「擬古十二首其一」「寓言三首其三」は、李白自身の不遇を思婦に託していると思われる。

## 三、宮女

宮女が主体である作は八首。これも半数は樂府である。「怨歌行」、「玉階怨」、「邯鄲才人嫁為廝養卒婦」、「秦女卷衣」（以上、樂府）。「古風」其四十九、「宮中行樂詞八首」其一・其六、「贈裴司馬」（以上、非樂府）。

うち「宮中行樂詞」は、わかい宮女たちの得意のさまや、あどけない姿態を描く。この作品を含む閨情詩の類に、李白は、女性のどういうところに魅力を感じていたのかが端的に表現されている。<sup>6</sup>それはすなわち、李白が閨情・閨怨の詩を多数詠じた原因の一半にせまることでもある。

他はみな閨怨であり、寵愛を得ない宮女の悲哀や、宮女だったが家に帰された女の辛苦などを詠じている。これらもまた李白自身の不遇を寄託している可能性が高い。

## 四、妓女

妓女を主体とする、あるいは妓女だろうと思わせる作は四首。「擬古十二首」其二、「寄遠十一首」其二・其三、「贈段七娘」。いずれも非樂府作である。

妓女の立場になって、愛する男と一緒に成れない妓女の悩みや悲哀を詠じるが、これらも李白自身の不遇を託している可能性が高い。

<sup>6</sup> 姿態は、白い歯・白い手・白い脚。身につけるものは羅衣・羅襪。所作は、笑う、恥じらう、性格は明るく活発など。

## 五、 商人の妻

商人の妻を主体とする作は四首。「荊州歌」、「長干行二首」其一・其二、「江夏行」。いずれも樂府である。どの作品も、遠く商いに行ったまま帰らぬ夫を思う妻の心持になって詠じている。これらの詩が作られたのは、李白自身が商人たちに伍して長江沿岸を渡り歩いた<sup>7</sup>ことが影響しているかもしれない。

李白の閨情詩で、数首のまとまりをもつものとしては、さらに「採蓮の女」、楊貴妃を詠じた「清平調詞」といったものがある。また、以上のいずれにも分類しがたい、様々な女を主体としていて、ひとまず「その他」と分類しているものが四〇首を超える。

発表時には、各分類中の典型的な作品を読むことにより、李白が、従来 of 閨情詩・閨怨詩に密着しながらも、それをどのように発展させ、何を創出したのか、（小稿で幾分かは述べているが）、その大要を明確にしたい。

---

<sup>7</sup> 小川環樹編『唐代の詩人—その伝記』（大修館書店、1975. 11）小川序説に「彼の父が商人であったろうとの推測を私はさきに試みた。……李白自身も青年時代には商人の群に身を投じていたときがあったらしく思われる」（12頁）。